

ここ数十年で科学をめぐる状況、特に社会との接点の大きい諸分野のおかれている状況は様変わりしている。科学技術社会論はこうした状況を研究の対象とするとともに、積極的に新しい意思決定やコミュニケーションのモデルを提案してきた。科学哲学は必ずしもそうした変化を先導する必要はないけれども、科学そのもののあり方が変わった部分については、科学哲学も影響をうけざるをえないだろう。本提題では科学的知識とローカルな知識の協同が求められるような場面を例にとりつつ、科学哲学の問題意識がこうした状況にどう拡張できるか考えてみたい。

本提題で事例として考えるのは保全生物学と、それをベースとした自然再生事業である。保全生物学は、生態学、遺伝学などの生物学諸分野の知識が環境の保全という目的のために組織されているという意味で、科学論でいうところのモード2科学の一種である。科学技術社会論における科学コミュニケーションの研究においてはいわゆる「欠如モデル」が批判され、コミュニケーションの双方向性が求められるが、特にモード2科学を巡るコミュニケーションでは非科学者の側からのインプットが研究そのものに必要である。保全生物学の場合には、伝統的生態学的知識(TEK)と呼ばれる現地の知識やノウハウが参照されるなどがその例である。霞ヶ浦のアサザプロジェクトの場合には市民の側が主体となって環境保全運動の中に保全生態学をはじめとするさまざまな領域の研究者やその知識を取り込んで活動を行っており、科学的な知識と市民の知識の関わりが変化しつつあることの一つの兆候として注目される。

科学をとりまく環境がこのように変化しつつあることをうけて、科学哲学の側も問題設定をもう一度見直す必要がある。提題者がこれまでかかわってきた中では、境界設定問題や社会認識論がこうした変化と向かい合うことになるだろう。

まず考えたいのは科学と疑似科学の線引きを行う境界設定問題の領域である。境界設定問題は近年では科学哲学においてポピュラーな話題ではない。すべての科学の領域に共通する基準は存在しないという認識の広がりや、これまで提案された線引きの基準はどれも多くの反例があったということが影響している。モード2科学の台頭は科学をさらに多様化させている上に、市民の持つノウハウが積極的に取り入れられるとなると、科学とそうでないものを明確に分ける理由はさらに減ったように思える。こうなると、一見したところ、境界設定問題はさらに時代遅れになったようにも見える。

しかし、逆に、それだけ研究の方向性においても利用のされ方においても多様化しているからこそ、それぞれの問題領域で信頼できる情報の「質保証」は必要となっている。モード2科学ではいわゆる「科学的」な情報源に限らずさまざまな情報源からの情報を利用するし、対応する環境保全などの活動の側についても同様のことがいえるが、その際に、

利用しようとしている情報源がどのくらいの確実性を持つかについての情報は、その情報を利用すべきかどうかの判断に重要だろう。「科学」という言葉は、そういう場面において、ある特定のタイプの質保証をクリアした情報やそうした情報を生み出す活動を指す言葉として位置づけなおすことができるだろう。

これと関わるのが、モード2型科学や対応する市民の側の活動において、どのように知的コミュニティは組織されるべきか、知的権威はどのように分配されるべきか、という問題である。これは社会認識論で論じられてきた話題であるが、分析系の社会認識論では市民まで含めた知的コミュニティが問題となることはこれまであまりなかった。しかし、モード2科学を科学の一種として認めるなら、分析系のアプローチでの分析の対象としてこうした領域も考え直す必要があるだろう。